

おけとの遺跡の保存と文化を伝え



発掘調査について語る札幌学院大学の犬塚講師



出土した石器類



発掘調査の様子

1、石器の収集と発掘調査のはじまり

置戸神社宮司の藤川尚位さんは、畑作業時の見慣れた存在であった石器の文化的価値を早くから見出し、安住や境野などの町内を歩き、精力的に石器を収集、昭和34年に論文を発表しました。

町は、藤川さんの収集した資料のうち特に学術的価値の高い125点を「藤川コレクション」として、平成24年に置戸町指定文化財としました。藤川さんが収集した膨大な資料は、後の学術調査のきっかけとなりました。

初めての学術的な発掘調査は、昭和31、32年に北海道大学医学部の児玉作左衛門教授一行が、安住から中里の常呂川左岸段丘上で行いました。

その後も昭和37年に明治大学考古学研究室などの単発的な発掘調査が行われ、平成22年からは、札幌学院大学の鶴丸俊明教授（現同大学長）率いる調査団が発掘調査を継続しています。

また、昨年度から北海道大学の中沢祐一助教は、同大学が保管している置戸町で発掘した石器を、学術資料として活用するための資料整理を進めており、10月に約4,500点の石器を収めた目録を出版する予定です。

2、現在の発掘調査について

札幌学院大学の調査団は、勝山神社敷地内で平成24年から考古学実習を行っており、今年も8月8日から15日の間、勝山公民館に宿泊し、発掘実習を行いました。同大学の学生は、勝山地区の盆踊りにも参加し、地域住民と交流を深めています。

15日から25日には、札幌学院大学の犬塚宜明講師を中心とした置戸黒曜石原産地研究グループが、縄文時代に黒曜石を採取する場所であった置戸山の南西緩斜面で、発掘調査を行いました。今回の調査は昨年から継続して行われており、地表30cm下の地層から石槍の破損品や未成品などの縄文時代に作られた石器が多く発掘されています。先史時代の人たちが、黒曜石を資源としてどのように利用していたかを解明することが目的です。発掘調査のリーダーである犬塚さんに、置戸山遺跡の発掘調査についてお話を伺いました。

■遺跡の保存と情報共有■

「遺跡は、木の伐採や運搬の際に、土が削れて発見されることがあります。現在、発掘している場所は、林野関係の方に調整していただき、ブルドーザーが通らないようにしていただきました。町の事業との兼ね合いもありますが、発掘場所を避